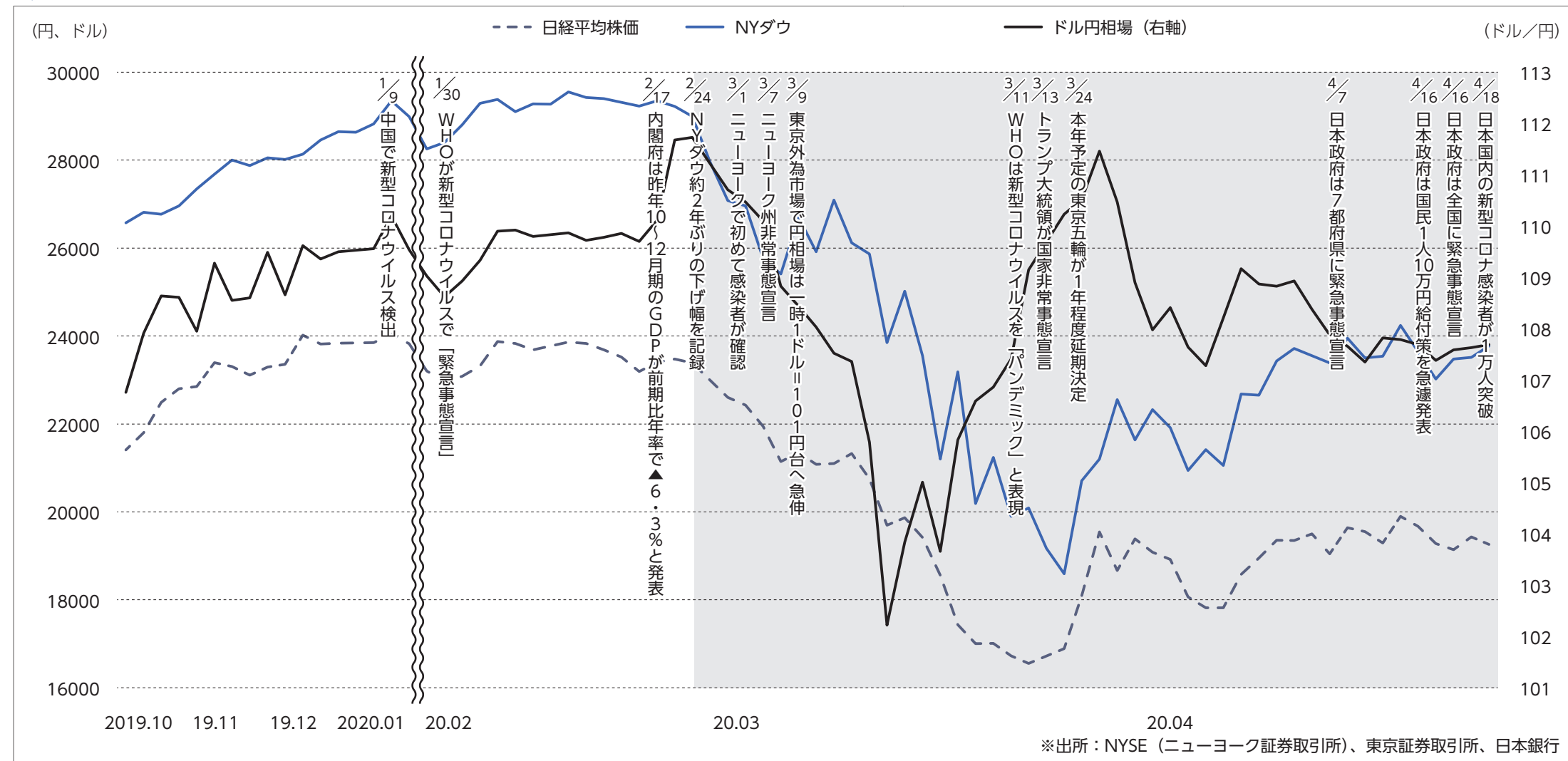


新型コロナで主な市場やファンドがどう変動したのか紹介する。

図表 1 日米株価とドル円相場



コロナ騒動発生後の 市場の動きを理解する！

解説▼**角川 総一**
(金融データシステム)

新 型コロナウイルスの影響を受けて各指標はどのように動いたのか、まず日米の株価と為替相場から見ていく。

中国で新型コロナウイルスが検出されたと報じられたのが今年1月。これが各国の株価に直接的な影響をもたらした。開始したのは2月下旬からである。これ以降3月半ば過ぎまで、日米株価はまさに「つるべ落とし」の症状を呈した。

この間、3月13日には米政府が米国全土に非常事態宣言を発令し、24日には東京五輪の延期が決まるなど世界中で状況は混乱を極めた。

その後の株価は戻りつつある。新型コロナウイルスの収束の兆しが見えない段階で株価回復をもたらししたのは、もっぱら金融・財政両面からの強力な政策対応であった。

ただし、5月12日時点の株
価は日米ともに、コロナ発生

前の高値と比べると20%弱低い水準にとどまっている。

今回の騒動で注目を集めたのが、「世界不安で株安が進むときには『円高』になる」という常識が裏切られたことだった。**図表1**を見ると、確かに2月下旬に株価が急落、合わせて円高が一気に進んでいる。しかし、その後は円安が一気に進行(ドルが上昇)、5月12日時点では1ドル107〜108円台と、コロナ発生前の水準とほぼ等しい。

3月半ばに至り、パニックが容易に収束しそうにはないとの見方が優勢になってからは、むしろ円安・ドル高の動きが顕著だ。これを踏まえると、「通常レベルのリスク」だと円高だが、「超がつくリスク」のときには、資産の流動性が圧倒的に高い米ドルが選好されるということが改め